

## フルシチョフの解任について

— 1964年10月党中央委員会総会速記録などに基づいて —

松戸清裕

はじめに

1964年4月、モスクワでソ連共産党（以下、党）中央委員会第一書記、閣僚会議議長ニキータ セルゲーヴィチ フルシチョフの70歳の誕生日を祝う式典がおこなわれ、フルシチョフにソ連邦英雄の称号、金星勲章が授与された。ソ連最高会議幹部会議長J. プレジネフは、勲章を授与してフルシチョフを讃えた。

あなたが党の舵をとり、スターリンの個人崇拜の暴露に勇敢なイニシアチブを発揮し、生活の様々な分野におけるその有害な結果の除去に関して巨大な活動を指導したことに対し、ソヴェト市民は常にあなたに感謝することでしょう。…ニキータ セルゲーヴィチ、あなたの名は、…わが国の生活の新たな歴史段階と永久に結びつけられるのです。<sup>1)</sup>

しかしその半年後、64年10月14日に開かれた党中央委員会総会において、フルシチョフは党第一書記、閣僚会議議長の職を解かれ、20年以上もの間フルシチョフの名は歴史から姿を消した。周知のように、その後ベレストロイカの過程でフルシチョフ期への関心が高まり、回想を中心に多くの論考が発表されたが<sup>2)</sup>、この間もこの64年10月14日の党中央委員会総会や、総会前に開かれた党中央委員会幹部会（政治局の当時の名称。以下、幹部会）の会議についての公式資料は公表されていなかった。しかし93年になって、この総会の速記録が、直前に開かれた幹部会の決定とともに『歴史アルヒーフ』誌に公表された<sup>3)</sup>。本稿のテーマは、これらの紹介・検討を通じて従来様々に取沙汰されてきたフルシチョフ解任の過程を検証することである。この際、エピソードを通じて従来あまり注目されていなかった側面を描くことも不十分ながら試みてみた。なお今年、1994年は、フルシチョフ生誕100年、フルシチョフ解任からは30年にあたり、フルシチョフ解任について新たな資料が公表されるかもしれない。そうでなくともアルヒーフ資料閲覧の機会が拡大した今日、さらなる新資料が見出される可能性は高い。本稿はあくまで現時点で利用可能な資料に基づいた、推論も交えた試論であることを付言しておく。

### 1. 「陰謀」の広まり<sup>4)</sup>

今回掲載された資料の中には、フルシチョフ解任の準備に関するものはない。この問題は註2で挙げた駒村論文が詳しく論じているので、ここでは駒村論文と各種回想によって、「陰謀」が組織された時期、その動機、その組織者を確認しておく。

フルシチョフ解任の準備された時期については、各種証言はほぼ一致するものの、わりに幅がある。フルシチョフの息子セルゲイの回想に依拠した駒村論文ではフルシチョフ解

任の具体的な準備が開始されたのは64年春頃とされているが、セルゲイ自身64年の1月から3月の間とかなり幅を見ているし、Γ. ヴオロノフはフルシチョフ解任は1年ぐらい準備されていたと述べている<sup>9)</sup>。64年10月の1年(ないしそれ以上)前と64年3月とでは、解任準備の開始時期としては決して無視できる幅ではない。これは、こうした証言ではフルシチョフに対する態度の打診と具体的な解任工作とが直接結びつけられているためではないか。一般的に考えれば、反フルシチョフで人々が結集した後に、フルシチョフ解任の具体的な「陰謀」が組織されることになるろう。反フルシチョフ派を組織していく過程、フルシチョフに対する態度の打診は、比較的長期的かつ曖昧におこなわれ、人により接触の時期も異なると思われる。反フルシチョフ派と判断された人々は、具体的な解任工作に引き込まれていく中で自分への打診について思い至り、これを解任工作の始まりと判断する。打診の時期自体が人により異なる上、打診の仕方が曖昧なため、結果としてかなりの幅が生じるのではないだろうか<sup>10)</sup>。幹部会メンバーらを対象としたフルシチョフに対する態度の打診と反フルシチョフ派の組織が63年末頃から64年3月までの3ヶ月ほどの間に漸次おこなわれたと考えればさほど不自然ではあるまい。セミチャスヌイとシェレーピンは「[64年の]すでに春に、(4月の)彼の70歳の誕生日前夜には、側近たちは彼の不寛容さに憤慨していた」と述べているが<sup>11)</sup>、この時にはすでに指導部内は反フルシチョフである程度結束していたのだろう。このように考えるとして、では具体的に「陰謀」が組織されたのはいつか。その始まりを明確に示す資料はないが、複数の証言が遅くとも8月には幹部会のレベルを越えてフルシチョフ解任のための工作がおこなわれていたことを示している<sup>9)</sup>。

このことを動機的面から検討してみよう。動機については従来も様々な理由が検討されてきたが<sup>9)</sup>、ここではこれらを詳細に検討することはせず、時期を考える上で重要な点だけを示す。私見では各種回想で挙げられる解任の動機は二つに大別できる。ひとつは、フルシチョフの態度への周囲の憤りである。晩年のフルシチョフが尊大となり、幹部会・中央委員会の同僚たちの考えを軽視したこと、これへの不満が高まっていたことを示す証言は多い<sup>10)</sup>。反フルシチョフ派形成にはこうした不満が重要な役割を果たしたと思われる。無論、フルシチョフの政策に対する不満も募っていたと思われるが、政策に対する不満は、異なる利害を持つ人々を結束させにくい。フルシチョフは、「陰謀」首謀者としてイグナトフ、ポドゴルヌイ、ブレジネフ、シェレーピンらの名を聞かされた時に、「いや信じられない…全く異なる人たちだ」と言い、あり得ないと考えたという<sup>11)</sup>。彼らの政策に対する態度、政治的見解が互いに異なっており、結束して自分に対抗するとは考え難いとフルシチョフは考えたのだろう。しかしフルシチョフの慢心、同僚たちへの平等に不当な扱いによって、こうした立場の違いを越えた、指導部全体を巻き込む反フルシチョフ派が組織されたのではなかろうか。

各種回想で挙げられるもうひとつの動機は、解任の直接的なきっかけをめぐるものであ

る。党・国家のトップであるフルシチョフの解任を正当化するには、フルシチョフ個人に対する積み重なった不満だけでは十分ではなかった。反フルシチョフ派に結集した人々もそれまでは表立った対立もなくフルシチョフと彼の政策とを支持してきたこともあって、「陰謀」を実行するにはフルシチョフと政策的にも対立するきっかけが必要だったのである。これについて、例えばシェレーピンは、フルシチョフが穀物、じゃがいもなど作物ごとの総管理局設立を提案したことによってフルシチョフ解任の問題が幹部会における早急の解決対象となったとし、さらに具体的に「総会召集への最後のテコ、『呼び鈴』となったのは、ピツンダへ飛つ前にブレジネフに渡した…農業生産の部門別管理への改組についての新たな覚書である…彼〔フルシチョフ〕はこの覚書を中央委員全員に知らせるため回覧することを提案していた。これを知ったのは幹部会員だけで、それ以上には送られなかった。この覚書は全員に、フルシチョフの権力からの解任が必要不可欠であるという気を起こさせた」と述べている<sup>12)</sup>。また、第8次5ヶ年計画草案が破棄されてもっと長期間の計画作成が提唱されたこと、その後も工業における組織再編が計画されていたことから、幹部会は11月の党中央委員会総会召集を阻止する必要に迫られたともいわれる<sup>13)</sup>。アジュベイによれば、フルシチョフは64年11月に、パスポート制度廃止や国家機関の役職の在職年限制限を盛り込んだ新憲法草案を採択しようとしていたという。アジュベイはフルシチョフ解任との関連は述べていないが、新憲法制定はフルシチョフの意に反して遅らされていたようで、フルシチョフが大胆な草案採択に踏みきろうとしたことも解任のきっかけのひとつかもしれない<sup>14)</sup>。これらをきっかけに具体的なフルシチョフ解任工作が組織されたのであれば、それは64年7月以降ということになろう。

「陰謀」の組織者の検討に移ろう。駒村論文は、従来首謀者と見られていたスースロフが他の幹部会員らから信頼されていなかったことなどから、「ブレジネフ・ポドゴルヌイ（それにシェレーピン）連合が幹部会及び中央委員会での支持を得る上で、大きな役割を果たした…」とする<sup>15)</sup>。スースロフについてはエゴリィチェフも「彼はフルシチョフ更迭の準備には直接参加しなかった。彼は信用されておらず、10月総会の準備から離れたところにおかれていた」と述べており<sup>16)</sup>、彼を首謀者とする見解は退けることができよう。ではブレジネフについてはどうか。『我等が祖国』にはこうある。クーデタの張本人がブレジネフ個人なのか、スースロフ、コスイギンの加わった集団的産物なのかを言うことは難しい。ブレジネフが用心深く慎重で、陰謀の始めから参加しなかったこともあり得る。しかし最高指導部の力の配分を考えれば、ブレジネフが加担した時にのみクーデタ実現のチャンスがあった<sup>17)</sup>。スースロフではなくブレジネフが大きな役割を果たしたことに異論はないが、筆者の見解はどちらかという『我等が祖国』の評価に近い。

「陰謀」の存在をフルシチョフは知っていたという。9月に「陰謀」の存在を知ったセルゲイはフルシチョフにこれを打ち明けたが、フルシチョフはこれを一笑に付した<sup>18)</sup>。しかしブレジネフの方は笑い事ではなかった。エゴリィチェフが述べるには、フルシチョ

ツがミコヤンに「陰謀」について調査するよう頼んだことを知ったブレジネフはある朝彼を自宅へ呼びつけた。エゴルイチェフが訪ねたところ、ブレジネフは青ざめ、震え、「コーリヤ、フルシチョフにすべて知られている。われわれはみんな銃殺される」と涙を流した。エゴルイチェフは「どうしたんです？。われわれが党に反対して何をしていますか？。すべて規約の枠内です。それに時代が今は違う。スターリンの時代ではないのです」と答えたが、ブレジネフは「君はフルシチョフを良く知らない。君は彼を良く知らないのだ」とつぶやいていたという<sup>19)</sup>。エゴルイチェフ自身は美化されているのだろうが、古い権力闘争のイメージに囚われ、怯え動揺するブレジネフの姿が描かれている。また、64年10月総会直前にブレジネフは東ドイツを公式訪問したが、日程が終了した後も「陰謀」発覚をおそれ帰国しようとしなかった。ブレジネフが帰国したのは、セミチヤスヌイから、帰国しないならば彼抜きで総会を開くと聞かされてからだという<sup>20)</sup>。こうしたエピソードはブレジネフの動揺を示している。ブレジネフ抜きでは「陰謀」は成功し得ないという点で、確かに彼は中心人物だった。ブレジネフが与したことではじめて「陰謀」が実現性を持ち得た。しかしかくも優柔不断で動揺しがちなブレジネフが「陰謀」を具体的に組織したのだろうか。フルシチョフ解任に関して述べられるブレジネフの振舞いに「陰謀」の積極的な組織者の像を見ることは筆者には難しい。推測に過ぎないが、実質的に「陰謀」工作を担ったのは、フルシチョフ期に培われた新たな時代の雰囲気を感じ、それ故に躊躇いの少なかった、より若い世代の人々だったのではなかろうか<sup>21)</sup>。

一説では、指導部の全メンバー、中央委員会の圧倒的多数が、10月総会以前にフルシチョフ解任を焦眉の政治的行為と見なしていたという<sup>22)</sup>。しかし「陰謀」が中央委員の大半にまで広まっていたかは微妙である。例えば中央委員と連絡を取っていたエゴルイチェフが、64年8月にリトアニアのA. スネチクスを訪れフルシチョフに関する話を始めると、スネチクスはこれを支持せず会話を避けた。10月総会後に「私のところへエゴルイチェフがやってきたが、私は信じなかった。これは挑発だと思ったのだ」と述べたという<sup>23)</sup>。こうした態度をとった中央委員が彼ひとりであるとは思えない。スネチクスの例を見ても、党中央委員会総会の場ではフルシチョフ解任を支持しても、事前の「陰謀」工作には様々な理由から慎重な態度をとることは十分に考えられるので、事前に「陰謀」に対しどのような態度をとったか、「陰謀」が圧倒的多数の中央委員に支持されるまでに広まっていたかは、さらに検討を要する課題であろう<sup>24)</sup>。

しかしいずれにしても、64年秋には指導部におけるフルシチョフへの支持は危機的なまでに落ち込み、「陰謀」が周到にめぐらされた<sup>25)</sup>。準備は完了し、黒海沿岸ピツンダでのフルシチョフの休暇中に、モスクワでフルシチョフ解任劇の幕が切って落とされた。

## II. 幹部会での討論 — 10月12-14日 —

10月12日、幹部会が召集された<sup>26)</sup>。ブレジネフを議長に幹部会員ヴォロノフ、A.

キリレンコ、コスイギン、ポドゴルヌイ、Ⅱ. ポリヤンスキー、スースロフ、H. シュヴェルニク、幹部会員候補B. グリシン、Jl. エフレーモフ、中央委員会書記（以下、II K 書記と記す）IO. アンドロポフ、П. デミチェフ、Jl. イリイチョフ、B. ポリャコフ、B. ポノマリョフ、A. ルダコフ、B. チトフ、シェレーピンが出席した<sup>27)</sup>。ここでの議論についてはほとんど資料がないが、幹部会決定「来たる党中央委員会総会および新期間の長期国民経済計画作成に関して生じている諸問題について」が採択された。決定の内容を簡単に示す。

1. 11月の党中央委員会総会で審議する予定の問題、新5ヶ年計画作成に関連して、フルシチョフの出席のもと幹部会の緊急会議で審議することが必要。ブレジネフ、コスイギン、スースロフ、ポドゴルヌイに対し、フルシチョフと電話で連絡をとり、10月13日に幹部会の会議をおこなうとの当決定を伝えることを委任する。
2. 党組織に送付された64年7月18日付のフルシチョフの覚書を党組織から回収する。
3. 幹部会での審議の結果を党中央委員会総会に報告するため、中央委員、中央委員候補、中央監査委員をモスクワへ召集する。総会開催の日時に関する問題はフルシチョフの出席のもと決定する。<sup>28)</sup>

出席者全員が合意に達したと言われているが<sup>29)</sup>、正式な幹部会決定の採択は幹部会の結束を強めたであろう。決定の採択によって、すでに党組織へ送付されたフルシチョフの7月18日付の覚書の回収、中央委員のモスクワ召集がいわば合法的な活動となった。ちなみにこの覚書の回収が幹部会で決定されたことは、フルシチョフにより提起された新たな農業管理再編がフルシチョフ解任の直接的きっかけとなったとの見方を裏付けている。また中央委員らのモスクワ召集を決定しつつも、総会開催の日時についてはフルシチョフ出席のもと決定するとあることから、13日の幹部会の展開やその後の総会の予定は、いまだ流動的だったと考えることができよう。

フルシチョフへの電話連絡がブレジネフ、コスイギン、スースロフ、ポドゴルヌイの4人に委任されていることも注目される。これには当然理由があると考えられる。想像だが、万一形勢が逆転した場合フルシチョフに電話をかけた人物が首謀者とされる可能性が高い。ため、幹部会決定に従い電話したという形式を整え、さらに有力な4氏に委任することで責任の所在を曖昧にし危険を軽減しようとしたのではないか<sup>30)</sup>。結局はブレジネフが、12日夕刻に幹部会員らのいるところでピツンダにいるフルシチョフへ電話をかけ、モスクワへ至急戻るよう伝えた<sup>31)</sup>。フルシチョフがこの時点で「陰謀」が問題となると察知していたとの証言もあるが<sup>32)</sup>、フルシチョフは平静だった。10月13日午後ミコヤンとともにモスクワに到着したフルシチョフを出迎えたセミチャスヌイは述べている。「彼を迎えたのは私とゲオルガゼだった。普通は出迎えはもっとずっと多かった。しかしこのことは彼を警戒させず、…いつものように握手の挨拶を交わした。フルシチョフは落ち着いていた…」<sup>33)</sup>。自らの解任が議題となると知りつつ平静さを保っていたのならば、

フルシチョフは、先に挙げたボボフの見解にあるような決意を秘めていたのかもしれない。

空港から直行したフルシチョフを議長に幹部会会議が始められた。12日の会議の出席者、フルシチョフに同行したミコヤンの他、ムジャヴァナゼ、マズーロフ、ラシードフ、シェレストも出席し、コズロフを除く幹部会員、同候補、U K書記全員による拡大会議であった<sup>34)</sup>。幹部会の議事は公表されていないので、シェレーピンの回想に依って簡単に紹介する。ポドゴルヌイ、ヴォロノフ、シェレストが党と国とに生じている状況の具体的かつ厳しい分析を述べ、マズーロフは党における理論的活動の水準低下について述べた。フルシチョフが指導の集団性を侵害したこと、良いことは自分に補し悪いことは地方機関の責任としたこと、党と幹部会の役割を低めたことをスースロフが批判し、コスイギンは、フルシチョフが自分の覚書を幹部会決議に代えたことを批判し、兄弟党の指導者たちに対するフルシチョフの態度への憤慨を表明した。フルシチョフが3年間一度も自分に電話をかけていないとのキリレンコの発言、丸4年間フルシチョフは自分を招いていないとのグリシンの発言など、フルシチョフが他の指導者をないがしろにしていたことへの批判が次々に述べられた。ミコヤンは、こうした批判を支持しつつも、党第一書記か閣僚会議議長の一方の職からの辞任を提案したが支持されなかった<sup>35)</sup>。シェレーピン自身は、農業政策の誤り、党・ソヴェト機関の分割、スエズ・ベルリン・キューバ危機などの重大な外交上の誤り、パリ首脳会談の決裂、中央委員会の軽視、フルシチョフの外国への家族旅行などについて批判したという<sup>36)</sup>。

会議は紛糾し、翌14日にも引き続きおこなわれた。全員が発言して激しい議論がおこなわれたが、出席者の間でも批判の応酬があったという<sup>37)</sup>。ブレジネフが、発言者全員との完全な同意を表明し、フルシチョフが自己の個人崇拜を広め、中央委員会を無視するようになっているとまとめた<sup>38)</sup>。最後にフルシチョフが発言した。とうもろこし、スエズ危機、キューバ危機、ベルリン危機、党機関の分割などについて反論し、自ら進んで党第一書記と閣僚会議議長の職を兼ねたわけではなく、幹部会が第一書記の活動を統制することは喜びであり、つまりは個人崇拜ではないのだと述べた<sup>39)</sup>。そしてフルシチョフは辞職を求める声明に署名した。

「党中央委員会、中央委員、中央委員候補、監査委員の同志諸君！

高齢のため、そして健康状態を考慮して、党中央委員会第一書記、幹部会員、閣僚会議議長ポストからの私の解任についての要請を承認してくれることを中央委員会にお願いする。

上に述べた理由により、私は現在自分に委ねられている職務を果たすことができない。

残りの人生と力を、党、ソヴェト人民のため、共産主義建設のための活動にささげることが中央委員会に約束する。フルシチョフ」<sup>40)</sup>

この声明を受けて幹部会決定が採択された。10月13-14日付の決定「幹部会に生じている諸問題、および中央委員会の活動における集団的指導のレーニンの諸原則の回復

に関する諸方策について」は前文でフルシチョフ批判をおこなっている。その内容は、集団的指導のレーニンの諸原則を侵犯したフルシチョフの誤り、正しくない活動の結果、幹部会に職務遂行を困難とする全く異常な雰囲気を作りだされた、党第一書記と閣僚会議議長の地位を占め権力を一手に集中したフルシチョフが中央委員会の統制下から脱し、幹部会員・中央委員の考えを考慮することをやめ、最も重要な問題を集団的討議なしに決定するようになった、幹部会・中央委員会の同志たちに対し不寛容さと粗暴さを発揮し、彼らの考えに軽蔑的態度をとり、第20回、21回、22回党大会の決議により定められた路線の実際的遂行において一連の巨大な誤りを犯した、となっている<sup>41)</sup>。第一書記と閣僚会議議長の兼任についてフルシチョフは反論していたが、決定でも批判されている。各党大会で定式化された路線自体は承認されている点も注目される。

このようなフルシチョフ批判に続いて、フルシチョフのネガティブな個人的資質、高齢、健康悪化のためフルシチョフが犯した誤り、活動における非党的な方法を自ら正すことができないとの幹部会の判断が示され、「同志フルシチョフにより出された声明も考慮し」、以下の決定を採択している。

1. 高齢および健康状態の悪化による、党第一書記、幹部会員、閣僚会議議長のプロトからの解任についての同志フルシチョフの要請を承認する。
2. 今後党第一書記と閣僚会議議長の仕事の一人の人物における合同は、適切ではないと認める。
3. 64年10月14日に党中央委員会総会を召集することを必要不可欠と認める。総会の開会を同志ブレジネフに委任する。幹部会および中央委員会書記局の名での報告演説を同志スースロフに委任する。<sup>42)</sup>

幹部会での議論に較べると、フルシチョフの政策上の誤りへの言及が少ないが、党の路線自体は承認されていること、政策の誤りを追及すると幹部会の責任も問題となることを考えれば、これは当然とも言えよう。決定の題にレーニンの諸原則の回復が挙げられていることにも、フルシチョフの指導方法・集団的指導原則の無視などフルシチョフ個人の誤りに問題を限定したいという幹部会の意図が見える。なお、シェレーピンは、この幹部会で中央委員会総会決議案が全会一致で採択され、党第一書記にブレジネフを選出するというボドゴルヌイの提案も同様に全会一致で採択されたと述べている<sup>43)</sup>。上記のように、幹部会決定にこれらは含まれていないが、総会でスースロフは「同志フルシチョフについて」という幹部会が採択した決議草案を読み上げている（後述）。同様に、後任人事に関しても幹部会内での合意があったと考えられる。

### III. 党中央委員会総会 — 10月14日 —

10月14日、臨時に党中央委員会総会が開かれた。中央委員169人中153人、中央委員候補149人中130人、中央監査委員63人中46人が出席した<sup>44)</sup>。議長ブレ

ジネフは開会の宣言に際して、以下のように緊急召集の理由を説明した。12日の幹部会における幹部会員、同候補、IIK書記による審議の過程で、幹部会に生じている異常な雰囲気の問題となり、13日にフルシチョフを議長に幹部会が開かれた。この幹部会にはコスロフを除く全員が出席し、幹部会の雰囲気が異常であること、この責任は集団的指導のレーニンの原則を侵犯し自らの個人崇拜を強調するフルシチョフにあることについて、幹部会員、同候補、IIK書記全員が一致した。国民経済の指導におけるフルシチョフの性急な目標設定、軽率で恣意的な行為の結果大混乱と深刻な誤算が生じたとの結論で幹部会は完全に合意した。幹部会は事態を許容できないものと認め、ただちに総会を召集しこの問題を審議することが必要不可欠と全会一致で認めたというものだった<sup>45)</sup>。ブレジネフは開会を宣言し、幹部会がスースロフに対して、幹部会員、同候補、IIK書記の一致した考えを報告するよう委任したことを明らかにした(7頁)。幹部会メンバー、IIK書記の一致が再三強調されていることが注目される。

続いてスースロフが報告演説をおこなった。以下これを検討するが、今回公表された速記録は原本ではない。総会終了後に幹部会によってスースロフ、ポドゴルヌイ、ブレジネフに総会プロトコール編集が委ねられた<sup>46)</sup>。どの程度校正されたかは分からないが、例えば約2時間と言われるスースロフの演説は<sup>47)</sup>、この速記録では約9頁である(7-15頁)。これの朗読には少なくとも約1時間はかかるのではないか。報告原稿には重複、繰り返しがあつたらうし、議場のざわめきや拍手により中断したとも考えられるので、総会での2時間弱の演説テキストの重複を整理し、註を付け加えた程度かもしれない。

スースロフはまず、幹部会員、同候補、IIK書記がフルシチョフの誤った指導方法により生じている異常事態を非常に憂慮していたこと、2日間の幹部会会議での慎重な審議の結果、幹部会員、同候補、IIK書記全員が一致して、フルシチョフの正しくない活動方法を厳しく批判したことを明らかにし(7頁)、党のレーニンの総路線が正しくかつ不可侵であることを強調、第20回、21回、22回党大会決議によるこの路線の設定におけるフルシチョフの一定の貢献、スターリン個人崇拜の暴露・平和共存政策遂行・諸民族間の平和と友好のための闘いにおけるフルシチョフの肯定的役割を認めつつも、フルシチョフが近年作りだした異常な雰囲気が幹部会、中央委員会、全党の活動に重大な損失をもたらしたこと、フルシチョフが第一書記と閣僚会議議長の地位を独占して同僚たちを軽視し、彼らの意見を無視し、成功は自分に誤りは地方の党・ソヴェト活動家に帰し、幹部会・中央委員会の統制下から脱するようになったことを非難した(7-8頁)。こうした幹部会・中央委員会軽視の例として、64年7月総会で予定にない演説をおこない科学アカデミーを解体すると恫喝したこと、独断で何度も勲章を授与したこと、党中央委員会総会をパレード的から騒ぎにかえてしまったことが批判された。焦眉の問題の実務的審議のための総会は近年実質上開かれておらず、召集されていたのは5-6千人にのぼるフルシチョフを賛美する人々の出席する全連邦会議であり、フルシチョフは中央委員からの批判をさけ



るため意識的にこれをおこなったというのである（8頁）<sup>48)</sup>。

フルシチョフひとりが共和国・州・地方<sup>734</sup>と結びついているとの印象をつくりあげるため、幹部会員が地方を訪れる可能性を事実上奪われたことも幹部会・中央委員会の活動に多大な害をもたらした。他方フルシチョフ自身の頻繁な旅行は、国内視察は何の役にも立たず、家族を含めた大グループでの外国旅行は高くついたと非難された（9頁）。

フルシチョフの演説・写真が連日新聞に掲載されるようになったことが批判されたが、これは『イズヴェスチヤ』紙編集長アジュベイを批判する意図もあったようで、続いて、アジュベイを社会的原則の外相としてアメリカ、西ドイツなどへ派遣したこと、特に西ドイツへの最後の訪問が社会主義陣営の友好国との関係を損ねたことなどが批判された<sup>49)</sup>。幹部会がアジュベイを同紙編集長から解任したことが明らかにされると「正しい！」との声があがり、拍手がわいた（9頁）。

スースロフは、幹部会員らは彼とともにモロトフ、カガノヴィチ、マレンコフの反党グループと闘ったのでありこの時のフルシチョフの貢献も忘れてはいないが、フルシチョフが近年急激に悪い方へ変わり、レーニンの指導者の資質を事実上失い幹部会を一層軽視し自身の個人崇拜をかきたてており、こうしたフルシチョフの行為が危険な性格を持ちはじめた以上は、幹部会員は彼に対して断固たる反撃をおこなうことを必要と見なしたと述べ（9-10頁）、幹部会が突然こうした挙にでることを決断したわけではないこと、フルシチョフの誤りの是正への支援を共産主義者の義務とも見なしていたことを強調し、しかしレーニンがスターリンを批判した否定的な性質がフルシチョフにも次第に現れるようになり、幹部会は高齢、健康状態の悪化からフルシチョフは任務を遂行できないと結論したと述べた。党第一書記解任という幹部会の行為を正当化するためか、黨員・勤労者の間でのフルシチョフの権威が近年急激に低下していたことも併せて述べられた（10頁）。

この後はフルシチョフの誤りが個別に批判されている。まずフルシチョフが農業指導を独占しようとしたことにはじまる極端な政策として、牧草栽培の禁止やとうもろこし・ひまわりの一面的押しつけが多く損失をもたらしたことが批判され、リヤザン事件<sup>50)</sup>でフルシチョフがラリオノフの試みを推奨したこと、59-62年の4年間に農業生産は年平均で計画の8%に対し1.7%しか成長していないこと、63年は大不作に終わったことが批判された（10-11頁）。さらに農業管理についてのフルシチョフの覚書とそれに基づく改組が地方党組織を混乱させたことが批判され、とくにひどい誤りとして64年7月18日付覚書がとりあげられた。幹部会がこの覚書の回収を決定したとのスースロフの発言は拍手で迎えられた（11頁）。

続いて工業がとりあげられ、工業の状況はずっと良いがこの分野でも多くの改組、フルシチョフの干渉により発展が妨げられているとし、新5ヶ年計画作成に関するフルシチョフの気紛れな干渉が批判された。地方党・ソヴェト機関、企業、国民経済会議、国家委員会の提案に立脚してゴスプランが作成した1966-70年の5ヶ年計画草案について、

フルシチョフはある大規模な会議で支離滅裂な演説をおこない、7-8ヶ年計画に置き換えることを提案したが、フルシチョフの目的は59-65年の7ヶ年計画のいくつかの部門での未達成をかくすことにあったと批判された(12頁)。

また、フルシチョフの改組、再編への熱中が批判され、特に、生産原則による州・地方の党・国家機関の改組<sup>11)</sup>はレーニンの指令と党綱領の要求からの逸脱であり、これによって混乱と活動におけるバラレリズムが生じ、ソヴェトの役割が急激に低下したことが批判された(12-13頁)。

最後に国際問題がとりあげられた。対外政策での党の路線の正しさが確認された後、対米・対中関係も含む複雑な国際情勢が示され、フルシチョフがここでも時に性急さを発揮したこと、フルシチョフは兄弟国の指導者たちを教え諭すことが大好きだったこと、例えばとうもろこしの播き方、農作物の高収穫を得る方法などをルーマニアなどソ連邦より収量の高い国で教えたことなどが批判された(13-14頁)。またポーランドからの航空機買い付け契約の破棄を突如通告したことも批判された(14頁)。

スースロフの報告でも、フルシチョフの指導方法の誤り、集団的指導原則の無視などが繰り返し強調されている。フルシチョフがイニシアチヴを發揮した個々の政策も批判されているが、党の路線自体の正しさが再三強調されているため、例えば中ソ論争など重要な問題におけるフルシチョフの役割はほとんど触れられていない。

スースロフは幹部会での議論の説明に移り、フルシチョフは当初批判を事実上否定したが、同志全員的一致した批判と断固たる非難の結果、批判を正しいものと認め、この幹部会での審議は幹部会が第20回党大会の指令を厳守し、集団的指導・党内民主主義のレーニンの原則を堅持していることを示していると述べたことを明らかにした(14頁)。フルシチョフが年齢と健康状態が職務遂行を許さないことを認めて自分の就いているポストからの解任を要請したとスースロフは述べて、中央委員会に宛てたフルシチョフの声明を読み上げた(14-15頁、前掲)。続けてスースロフは、フルシチョフが総会で発言しないことを求めたと述べて、幹部会がフルシチョフの声明を検討し、彼を党第一書記、幹部会員、閣僚会議議長のポストから解任することが必要不可欠との結論に達したことを明らかにした。嵐のような、長く続く拍手が沸き起こった(15頁)。

演説の最後にスースロフは、幹部会の採択した総会決議草案「同志フルシチョフについて」を読み上げた。これは10月13-14日付幹部会決定とほぼ同じ内容で、集団的指導のレーニンの諸原則を侵犯したフルシチョフの誤りの結果幹部会に異常な雰囲気を作りだされていること、党第一書記と閣僚会議議長の地位を占めたフルシチョフが中央委員会の統制下から脱し、幹部会員・中央委員の考えを考慮することをやめ、最も重要な問題を集団的討議なしに決定するようになったこと、幹部会・中央委員会の同志たちに対し不寛容さと粗暴さを発揮し、第20回、21回、22回党大会の決議により定められた路線の実際的遂行において一連の巨大な誤りを犯したことを批判し、フルシチョフのネガティ

ブな個人的資質、高齢、健康悪化のためフルシチョフが自ら犯した深刻な誤りを正すことができないとの総会の考えを示し、

1. 高齢および健康状態の悪化による、党中央委員会第一書記、中央委員会幹部会員、閣僚会議議長のポストからの解任についての同志フルシチョフの要請を承認する
2. 中央委員会第一書記と閣僚会議議長の職務をひとりの人物に今後合同することは、適切ではないと認める

と決定している。この草案は、嵐のような長く続く拍手に迎えられた（15頁）。

スースロフの演説が終わり、議長ブレジネフがどう進めるかを訊ねると、議場から「すべて明らかだ。討論を開始しないことを提案する。幹部会の報告からすべて明らかだ。決議の採択にとりかかろう」との声（複数）があがった（15-16頁）。ここでブレジネフは「同志諸君！あなたがたの提案は幹部会の考えに合致している。誰も討論開始を主張しませんか？」と述べた（16頁）。討論をおこなわないとの幹部会の考えのこうした巧みな表明は、反論を封じる効果を持ったであろう。結局、フルシチョフが中央委員会の信頼にこたえなかったといった若干の文面上の補足が提案されただけで、討論なしに決議草案が採択された（16頁）。討論抜きでの採択に対しては様々な評価があるが、シェレーピンは「彼を党から除名すべきだ！」などフルシチョフに対する罵声が響いたことなどに触れ、討論の開始はフルシチョフにとってより悲劇的な、中央委員会と党からの除名という形で終わることもありえたとも述べている<sup>52)</sup>。

採択は中央委員による挙手でおこなわれ全員一致で採択されたが、ブレジネフはその後、出席している中央委員候補、監査委員に採択したいかと問い、議場からの「お願いする」の声に採決をおこない、結局出席者の全員一致で採択された<sup>53)</sup>（16頁）。この後ブレジネフは、決議の第1項のみを報道すること、総会について全党に知らせること、翌15日に共和国党書記、州・<sup>73)</sup>地方党書記を中央委員会に集め、いくつかの問題を審議することを提案し採決なしで承認されると、党第一書記選出と、閣僚会議議長についての問題の検討に移ると述べた（16-17頁）。

第一書記へのブレジネフの選出を提案する声（複数）が議場からあがり、ポドゴルヌイを議長に採決がなされた。中央委員による全員一致の採択の後、議長が中央委員候補、監査委員に採決を呼びかけ、ブレジネフが全員一致で第一書記に選出された。閣僚会議議長についても議場からコスイギンを推薦する声（複数）があがり、同様の手続きを経て、最高会議幹部会に対しコスイギンを推薦することが全員一致で採択された。後任人事の問題が片付くとブレジネフは閉会を宣言し、嵐のような拍手の中、総会は閉会した（17頁）。

総会の経緯を見るに、民主的な手続きを踏むことに注意が払われていると言えるだろう。見たようにスースロフの報告に対する討論をおこなわないとの幹部会の考えは、議場からの声に呼応して述べられた。この議場からの声は、第一書記・閣僚会議議長の人事に関しても提案者の役割を果たしている。おそらくは、幹部会の意向に沿った発言をする「さく

ら」が用意されていたと思われるが、中央委員の意向を尊重するとの形式を作りだすのに役立っている。また採決についても、議決権のある中央委員による採決に続いて、中央委員候補・中央監査委員による採決もおこなうことで、「中央委員会を軽視した」フルシチョフの対極に自分たちを位置付けるとともに、文字通り総会の総意に基づく正統性を獲得しようとの意図があるように思われる。

なお、シェレーピンによれば、総会では第二書記選出の提案が出され、具体的にポドゴルヌイが候補として提案されたが支持されなかったという<sup>54)</sup>。同席のセミチャスヌイも否定していないので、この提案は実際におこなわれたと思われるが、この経緯は速記録からは完全に脱落している。

最後にフルシチョフ解任がどのように受けとめられたかという問題に触れておきたい。すべての中央委員がフルシチョフ解任に賛成していたとシェレーピンは述べる<sup>55)</sup>。なるほど総会決議は全会一致だが、直ちにこの見解に同意するわけにはいかない。全員一致の幹部会決定とフルシチョフ自身の辞任声明とが報告された以上、解任に反対の中央委員がいても総会で異議を唱えることはあり得ないからである。セミチャスヌイは述べている。「幹部会の会議中、…10月13日の終わり近くに、最高会議幹部会員、中央委員らからの電話が鳴りはじめた。この時までには彼らの多くがモスクワに来ていた。ある者は激昂していた：『君は何をすわっているんだ、フルシチョフが解任されるのに、君は何もしていないのか！』…」<sup>56)</sup>。激昂していた者が、フルシチョフを擁護する立場をとっていたことは明らかで、この時点でフルシチョフ解任を承認していない人々（おそらくは中央委員）がいたことは確認できる。また本稿註44で述べたように、フルシチョフ支持という理由で何人かの中央委員が総会出席を妨げられたのが事実であれば、シェレーピンの見解は明らかに事実と反している。

しかし、64年秋には中央委員会だけでなく党内、社会全体においてもフルシチョフに批判的な人々が大勢を占め、フルシチョフ解任を歓迎したとの見解は多い<sup>57)</sup>。だがそれでも、フルシチョフ個人・彼の政策に対して反発・不満を抱いていたからといって、幹部会に同調しフルシチョフ解任に賛同するとは限らないという点に留意しておきたい。党第一書記、幹部会員、閣僚会議議長の要職すべてから解任することへの反対や、フルシチョフをスケープゴートとし問題をすべてフルシチョフに押しつける幹部会の態度への反発もありえよう<sup>58)</sup>。フルシチョフの解任がどのように受けとめられたかは、まだ十分に明らかにされてはいない。「フルシチョフの活動や、彼の解任に関する決議を採択した中央委員の大半の動機、目的というものの一義的で完全な評価は今日まだない。フルシチョフの更迭を支持した社会的集団についての問題も十分に明らかではない。1964年10月党中央委員会総会とその政治的結果の評価は、多くの新たに明らかになった事実や、この事件の直接の参加者の証言、その後の歴史発展の結果といったあらゆるものの総体の分析に基づいてのみおこなわれうる」という89年の見解はまだ過去のものではない<sup>59)</sup>。

むすびに代えて

幹部会・党中央委員会総会がフルシチョフ解任を審議している間中、クレムリンは平常通り見学者に開放され、いかなる非常的措施もとられていなかった。『我等が祖国』ではこのことはフルシチョフ解任の準備の周到さを示すとされている<sup>80)</sup>。確かに、軍・KGBの確固たる支持を取り付けていたからこそ非常措置をとる必要がなかったという側面は否定できない。しかしこのことは他にも重要なことを暗示しているように思われる。「陰謀」の実行者たちは、党規約上の適法性・正当性を確信しており、57年の「反党」グループ事件の際のように幹部会の議場を閉ざして密室で事を決する必要を認めず、またそのような方法をとってはならないと考えていたのではないか。総会自体、討論がなかったという問題はあるにせよ、規約上の手続きを極力重視しておこなわれた。もはや適法性は無視し得ない時代となっていたのだ。無論、こうしたことは、フルシチョフの側も非常手段を採用しないとの信頼に基づいていた。セミチャスヌイは述べている。「…強調しておくべきだが、フルシチョフの貢献は、彼の更迭が総会で、公開で、非常事態の状況を作りだすことなく起こったという状況を彼が作りだしたという点にある」<sup>81)</sup>。このような雰囲気こそが、フルシチョフの作りだした、そして時代を特徴づけるものであった。そしてこうした状況は、フルシチョフ解任を目論む人々にとっても既に前提とすべきものであり、また、当時の人々がフルシチョフを評価する最大の点だったのである。

…少なくともひとつのことに対して、フルシチョフに深々とお辞儀する必要がある — スターリン的テロルを彼はきつぱりと、そして永遠に終わりにしたのだ。自分の反対者・競争者たちを彼は肉体的には撲滅しなかった。わが国におけるこの政治的蛮行の時期はフルシチョフのもとの終わり、以後復活することはなかったのだ。<sup>82)</sup>

- 1) XX съезд КПСС и его исторические реальности, М., 1991, (以後 XX съезд КПСС и его...) ,стр.389.
- 2) 回想としては Алексей Алжубей, Те десять лет, М., 1989; В.Н.Новиков, "В годы руководства Н.С.Хрущева", 《Вопросы Истории》, 1989, №1,2; С.Н.Хрущев, Пенсионер союзного значения, М., 1991; Никита Сергеевич ХРУЩЕВ: Материалы к биографии, М., 1989 など。論考は Е.Зубкова, "Октябрь 1964 года. поворот или переворот?", 《Коммунист》, 1989, №13 などがある。こうしたベレストロイカ期のソ連でのフルシチョフをめぐる議論を整理したものとして David Nordlander, "Khrushchev's Image in the Light of Glasnost and Perestroika", The Russian Review, vol.52, April 1993がある。これによればフルシチョフ期について漸進に論じられるようになったのは、1987年11月にゴルバチョフが革命70周年記念演説で言及して以後のことという (Ibid., p.248)。わが国では駒村哲「フルシチョフ解任に関する一考察 -セルゲイ・フルシチョフの証言を中心に」(ソビエト史研究会編『旧ソ連の民族問題』木鐸社1993年所収)が、ベレストロイカ期の議論を整理したものとなっている。
- 3) 《Исторический архив》 (以後 И А と略す) ,1993, №1, стр.3-19.
- 4) ここでいう「陰謀」とは、単なる反フルシチョフ派の結成ではなく、フルシチョフ解任を目的とする具体的な組織活動を念頭においている。
- 5) 前掲駒村論文220-1頁。С.Н.Хрущев, Пенсионер союзного значения, (以後 Пенсионер...) ,стр.42, 邦訳『父フルシチョフ 解任と死』福島正光訳 草思社 1991年 上 71頁 (邦訳は英語版からの訳。特に必要でない限りロシア語版と邦訳の頁数のみ記す)。XX съезд КПСС и его..., стр.406. ヴオロノフは当時幹部会員・ロシア共和国閣僚会議議長 (以下役職はすべて当時)。
- 6) 例えばセルゲイは、陰謀の始まりを64年3月14日とする幹部会員候補シェレストの証言を引用しているが、これを読む限り、この日シェレストを訪れたポドゴルヌイとブレジネフは、解任どころかフルシチョフに対する態度にも言及しておらず、シェレストが後の展開と照らしてこの時打診されたと考えているだけのようにも思われる (Пенсионер..., стр.42-3; 邦訳 72-3頁)。
- 7) Неизвестная Россия. XX век, I, М., 1992, стр.278 (以後 Неизвестная...) . 89年3月27日、5月22日の合同インタビュー。セミチャスヌイはКГБ議長、シェレーピンは中央委員会書記・閣僚会議議長代理。
- 8) ロシア共和国最高会議幹部会議長И. Игнатюфの8-9月の工作については Пенсионер..., стр.91-101; 邦訳 136-150頁を参照のこと。モスクワ市党委員会第一書記И. Егоричевの工作については Неизвестная..., стр.293.
- 9) 例えば Michel Tatu, Power in the Kremlin: From Khrushchev to Kosygin, trans. by H. Katel, New York, 1969, pp.387-398, などを参照のこと。
- 10) 「晩年のフルシチョフは幹部会員と会うのをやめ、彼らの考えを考慮に入

- れるのをやめていた。尊大かつ粗野になり、追従、ごますりを奨励した」(シェレーピン,《Труд》,14/III/1991,стр.4)。「権力にあった最後の年月は、指導に関する同僚のあからさまな軽視、自分自身への陶醉、…自らの《崇拜》の創造[が生じた]」(А.Александров-Агентон,“Брежнев и Хрушев: записки помощника четырех генсеков,《Новое время》, №22 мая 1993 г., стр.37-8)。またセミチャスヌイ・シェレーピン「…70歳の誕生日前夜には、側近たちは彼の不寛容さに憤慨していた」(Неизвестная...,стр.278.)。
- 11) Пенсионер...,стр.108.邦訳160頁では「彼らはまったくそういう人間ではない」とあるが、原文の разные людиは、互いの間で異なっているとの意だろう。英訳では different people である ( Khrushchev on Khrushchev: An Inside Account of the Man and His Era, trans.& ed. by W.Taubman, Boston,Toronto,London,1990, p.108)。
- 12) 《Труд》,14/III/1991,стр.4; Неизвестная...,стр.279. 64年7月11日に開かれた党中央委員会総会でフルシチョフは、議事日程に予定されていなかったにもかかわらず農業管理制度改組を中心とする演説をおこなったという。その後7月18日付の覚書で複数の総管理局による専門化された部門別農業生産管理システムへの移行を提案したようだ。7月20日付の幹部会決定によりこの覚書は地方党組織へ送付された。この問題の審議のため64年11月に中央委員会総会を召集することが予定されていた。7月18日付の覚書も公表されていないが、引用部分からもわかるように農業管理改組についてもう1通公開されていない覚書があるようだ。エゴルイチェフも、9月に渡された覚書を確認している。7月18日付覚書は党組織に送付され、10月12日付幹部会決定により回収されるが、2通目の覚書は幹部会に留め置かれたという(И А, 1993, №1, стр.18; Неизвестная..., стр.296)。農業管理改組の問題については М.Тату, op.cit., p.398 も参照のこと。
- 13) XX съезд КПСС и его...,стр.405-6:1959-65年の7ヶ年計画終了後は、再び5ヶ年計画が予定されていた。64年7月24日、フルシチョフを議長とする閣僚会議幹部会で1966-70年の第8次5ヶ年計画草案作成の基本方針が検討された。しかし9月末にはフルシチョフは、党綱領に定められた20年間の残り15年を、5ヶ年より長期の計画で経済建設をおこなうことを主張し、5ヶ年計画草案を事実上反故にした(там же,стр.397-8; И А 1993, №1, стр.19)。
- 14) А. Алжубей,“По следам одного юбилея”,《Огонек》,1989, №41, стр.10. アジュベイはフルシチョフの娘婿で党中央委員。1959年より『イズヴェスチヤ』紙編集長。憲法案審議の経緯については J.M. Glison, “Khrushchev, Brezhnev, and Constitutional Reform”,Problems of Communism,September-October 1972 を参照のこと。
- 15)前掲駒村論文223頁。
- 16) Неизвестная..., стр.291.
- 17) Наше отечество. опыт политической истории,Т.2, М., 1991, стр. 480.
- 18)これについてセルゲイは、「陰謀」参加者が古くからの友人なのでフルシ

チヨフは信じなかったし信じたくなかった、フルシチョフは老いて肉体的にも精神的にも疲れており、権力闘争をする気もなかったとの考えを示している（Пенсионер..., стр.128.邦訳186-7頁）。ガヴリール・ボボフは、フルシチョフは陰謀についての噂の綿密な調査よりも更迭のリスクを選んだ、フルシチョフは指導者を反乱から守る方法を良く知っていたがこれを復活させることを望まなかったのだと述べ、フルシチョフがスターリン的政治闘争と決別するため「陰謀」を甘受したかのように描いている（Г. Попов, "Два цвета времени или уроки Хрущева", 《Огонек》, 1989, №42, стр.14）。この評価は理想化が過ぎるかもしれないが、これらの気持ちが複雑に入り交じっていたことは有り得よう。なおフルシチョフに「陰謀」が知らされていた可能性については Пенсионер..., стр.88.邦訳132-3頁も参照。

19) Неизвестная..., стр.291.

20) Там же.このエピソードから、幹部会から党中央委員会総会に至るまでの日程が既に決定されていたと解釈することもできるが、これを聞いたインタビューアーの、ブレジネフの出発前ないし彼のベルリン滞在中に総会日程の合意がなされていたのかとの質問に、エゴリイチェフは「総会の具体的な日には [13-14日の] 幹部会の会議で決定された」と答えている。

21) 推論に過ぎないので世代論に深入りはしないが、生年と入党年を見ると、ブレジネフが1906年生、31年入党、以下同様にボドゴルヌイの03年、30年、スースロフの02年、21年に対し、シェレーピンは18年、40年、エゴリイチェフが20年、40年、セミチャスヌイが24年、44年と、生年でも入党年でもほぼ10年以上の差がある。53年のベリヤ処刑まで、政治的敗者は肉体的にも抹殺されてきた。それ以前に十分な党活動歴を積み、直接間接にフルシチョフの下で働いてきたブレジネフらと、実質的なキャリアをフルシチョフ期に積んできたシェレーピンらとでは、フルシチョフや時代に対するイメージが異なるのも当然だろう。セミチャスヌイ自身の証言によれば、ブレジネフによってフルシチョフの肉体的抹殺も提案されたが、そういう情況にないと言って拒否したという（Пенсионер..., стр.65.邦訳103頁）。

22) XX съезд КПСС и его..., стр.407.

23) Неизвестная..., стр.293.スネチクスはソ連共産党中央委員・リトアニア共産党中央委員会第一書記。

24) Пенсионер..., стр.91-101; 邦訳136-150頁には地方党書記への工作の様子が描かれている。

25) 例えば Наше отечество, Т.2, стр.480.

26) ИА, 1993, №1, стр.3.12日の幹部会召集は通説ではあったが、11日との説もあった（G. Boffa, 『ソ連邦史』坂井信義・大久保昭男訳、大月書店4巻 1980年 302頁参照）。

27) ИА, 1993, №1, стр.3.これは幹部会員、同候補、中央委員会書記の全員ではない。ピツンダで休暇中のフルシチョフ、ミコヤン、闘病中のΦ、コズロフの他、グルジア、白ロシア、ウズベク、ウクライナの各党第一書記В.ム



ジャヴァナゼ、K. マズーロフ、III. ラシードフ、II. シェレストの4人の幹部会員候補が出席していない。共和国在住の4人の欠席は、12日の幹部会が予定の行動ではないことを示している。なおコズロフはフルシチョフと対立する保守派の代表と見られたり、第一の後継者と目されたりと指導部内での位置付けの難しい人物だが（セルゲイ邦訳47頁参照）、コズロフの影響下で長く働いたノヴィコフは、コズロフがいたら64年10月総会でフルシチョフの反対者たちは何もうまくいかなかっただろうと述べている（もっともノヴィコフは10月総会以前にコズロフが死亡したかのように書いており、記憶が混乱しているようだ。 В.И.Новиков, Указ. статья, №2, стр.114）。

28) ИА, 1993, №1, стр.4.冒頭に「極秘」と記されている（下線は原文）。7月18日付覚書については本稿註12を参照のこと。

29) シェレーピン, 《Труд》, 14/III/1991, стр.4.

30) つまりは電話する者を安心させる措置である。12日夕方ブレジネフに対して、フルシチョフに電話をかけ、休暇から呼び戻すよう長いこと説得がおこなわれた、ブレジネフは怖じけづき、おそれていたとシェレーピンは述べている（Неизвестная..., стр.280）。

31) セルゲイはセミチャスヌイとシェレストのインタヴューも利用し、スースロフが電話したとする（Пенсионер..., стр137, 139.邦訳198, 202頁）。これに依拠する駒村氏も同様である（前掲駒村論文225頁）。一方シェレーピンはセミチャスヌイと合同のインタヴューでもブレジネフが電話したと述べ、ブレジネフとフルシチョフの会話にも触れているが、セミチャスヌイは異議を唱えていない。またエゴルイチェフは「…ピツンダに電話したのはスースロフとするセルゲイ フルシチョフは間違っている。電話したのはブレジネフだ」と述べている（Неизвестная..., стр.280-1, 291）。エゴルイチェフは幹部会に出席していないが当時ブレジネフと近しく、ブレジネフから詳しい事情を聞いている可能性は高い。確かに電話を委任された4人のうちにスースロフは入っているが、スースロフが幹部会の同僚から信頼されておらず、フルシチョフ解任の準備から遠ざけられていたことを考えれば、スースロフが電話した可能性は低いのではないか。

32) フルシチョフは電話の後でミコヤンに、電話はセルゲイが話していたこと（つまり「陰謀」）に関係があると思うと述べ、自分が問題となっても関わらないつもりだと述べたという（Пенсионер..., стр138.邦訳200頁）。

33) Неизвестная..., стр.281.М. ゲオルガゼはソ連最高会議幹部会書記。

34) ИА, 1993, №1, стр.3.12日にはモスクワにいる者だけで会議が開かれたのに対し、13日にはコズロフを除く全員が出席したわけだが、13日の幹部会召集も事前に確定していたわけではなかった。確かに12日の幹部会決定で13日の幹部会開催と中央委員のモスクワ召集が決定されているが、実際に幹部会が開かれるかは、フルシチョフがモスクワ帰還を承諾するかにかかっていた。セミチャスヌイによれば、フルシチョフのモスクワ帰還承諾が明らかとなったのは12日夜半になってからという。セミチャスヌイは続けて述べる。「総

- 会開催の日付は前もって議論されてはおらず、状況によって固まったのだ。もしフルシチョフがこの日に帰還することに同意しなかったならば、誰も彼をむりやり連れてくることはしなかっただろうし、総会の日は違っていただろう」( Неизвестная..., стр.280)。これは13日の幹部会にもあてはまる。
- 35) 《Труд》, 14/III/1991, стр.4.
- 36) Неизвестная..., стр.281-2.
- 37) シェレーピンは、農業担当のBK書記ボリャコフ、CKロシア共和国ビューロー第一議長代理エフレーモフが批判されたという( Неизвестная..., стр.280)。幹部会の議事録は公表されておらず、保管されているかも確認できない。4人の書記長の側近だったアレクサンドロフ-アAGENTフは、存在は疑わしいとする(А.Александров-Агентон, Указ. статья, стр.40)。
- 38) 《Труд》, 14/III/1991, стр.4.
- 39) Там же.また XX съезд КПСС и его..., стр.408-410.
- 40) この声明は総会でスースロフが読み上げた(ИЛ, 1993, №1, стр.14-5)。
- 41) ИЛ, 1993, №1, стр.4-5.この決定も「極秘」とされている(下線は原文)。
- 42) Там же, стр.5.
- 43) 《Труд》, 14/III/1991, стр.4.
- 44) ИА, 1993, №1, стр.6(議長ブレジネフの開会宣言)。この出席率は高くない。12日の幹部会決定を受けた中央委員召集ということを考えれば、もともと高い出席率は期待できないが、フルシチョフ支持の中央委員数名は出席を阻まれたという( Пенсионер..., стр163.邦訳237頁)。以下速記録の典拠については、本文中に頁数を括弧で括って示す。
- 45) ИА, 1993, №1, стр.5-6.なおこのブレジネフの演説は、速記録に含まれていなかったのを併せて掲載したという(там же, стр.3)。
- 46) ИЛ, 1993, №1, стр.3.速記録冒頭に「万国のプロレタリア、團結せよ!」、「秘密厳守」、「コピー禁止」、「3ヶ月以内に中央委員会に戻すこと」と記されている(6頁、下線は原文)。原本は発見されていない(3頁)。
- 47) セミチャスヌイ、シェレーピンの合同インタビューで、インタヴューアーが演説は20分ほどとの意見を紹介したのに対し、シェレーピンは約2時間だったと答え、セミチャスヌイも異議を唱えていない。また、演説のテキストは配付されなかった( Неизвестная..., стр.284)。 Наше отечество, Т.2 стр.482-3 ではスースロフの報告は「フルシチョフの正しくない行為により幹部会に生じた異常事態について」と題されているが、速記録には題はない。
- 48) フルシチョフ在任中には、こうした拡大総会としての召集は非党員も含めた多くの人々の意見を反映する一層民主的な試みと評価されていた。例えばゴズロフの説明を見よ(Ф.Р.Козлов, "КПСС - Партия всего народа", 《Проблемы мира и социализма》, №6 июнь 1962 г., стр.4)。
- 49) 社会的原則とは、ひとことで言えば、公的な職務を無給・ボランティアで代行すること。管理部門の職員削減のため、また官僚主義への対抗策としてフルシチョフは社会的原則による活動を推奨した。アジュベイは64年7月の

西ドイツ訪問中に連邦首相と会談、ドイツ統合の問題、フルシチョフの西ドイツ公式訪問の可能性などに言及したとされ、ポーランド、東ドイツの指導部の懸念と反発を呼び起こした（И А, 1993, №1, стр.18）。

50) 1959年リャザン州党第一書記А. ラリオーフが同州の食肉生産を2倍、後には政府への引き渡し・販売量で3倍にすることを宣言、フルシチョフがこれを支持しラリオーフは社会主義労働英雄となったが、目標達成のため近隣諸州から家畜が買い付けられ手あたり次第屠殺された結果、同州の畜産は完全に荒廃した。事が露見しラリオーフは自殺した。

51) 1962年11月の党中央委員会総会は、州以下の党組織を生産原則に基づいて工業・農業党組織に再編することを決定した。これによって多くの州に工業州党委員会と農業州党委員会が設立された。また党組織の再編にならって、ソヴェト・労働組合・コムソモールの組織も再編された。

52) 《Труд》, 14/III/1991, стр.4. シェレーピン自身も討論をおこなう必要があると思ったと述べている。また例えば、セルゲイの引用するセミチャスヌイの見解（Пенсионер..., стр163. 邦訳236頁）。

53) フルシチョフの中央委員の地位は問題とされていない。このことは曖昧であり、例えば筆者の手元にある便覧には1934-64年中央委員と記してあるが（Политбюро, Оргбюро, Секретариат ЦК РКП(б)-ВКП(б)-КПСС, Справочник, М., 1990, стр.243）、57年6月の反党グループ事件の際はマレンコフ、カガノヴィチ、モロトフ、シェピーロフの中央委員会からの除名も決議されていること、64年11月総会ではアジュベイの中央委員会からの除名が決議されていることなどから、除名が決議されていない以上フルシチョフは第23回党大会での中央委員改選まではその地位を維持したと考えられる（前註を付した本文でのシェレーピンの証言も参照）。公式には高齢と健康状態の悪化による辞任との形をとっているため、常勤の職ではない中央委員の地位を問題にはできなかつたのかもしれない。党規約には中央委員会からの除名は総会での秘密投票による2/3の賛成を必要とするとあり、秘密投票で否決されることをおそれてこの問題を提起しなかつたということも考えられる（XXII Съезд Коммунистической Партии Советского Союза, Стенографический отчет, т.3, М, 1962, стр.344）。

54) Неизвестная..., стр.284.

55) 《Труд》, 14/III/1991, стр.4.

56) Неизвестная..., стр.277-8.

57) アルバトフは、フルシチョフ更迭は真の「宮廷革命」であり党中央委員会総会は単に適法性の外観を与えるためだけに召集されたと述べつつ、「非常に奇妙な」ことに党と国とにおいてこの不法な行為に対して実質上不満が見られず、逆にほとんどあらゆるところで満足と喜びとをもって迎えられたと述べている（Г.Арбагов, Затянувшееся вмадорование (1953-1985 гг.): Свидетельство современника, М., 1991, стр.102）。フルシチョフ解任を民衆は平静にうけとめ、満足に感じさえし、党アパラートは更なる満足をもって

うけとめた（Никита Сергеевич ХРУЩЕВ...，стр.169，O. Волобуев，С. Кулешов）。アジュベイは、64年10月にフルシチョフが休暇に入る時には、商店では多くの生活必需品の人為的な不足がすでに1週間以上も作りだされ、社会的不満の鍋が至る所で火にかけられていたと、64年秋のフルシチョフに対する不満の広まりにおける作為の存在を指摘している（Л.Аджубей，Указ. статья，стр.10）。これについては Пенсионер...，стр.66-7.邦訳106頁も参照。

58) Наше отечество，Т.2，стр.483には中央委員の間にはフルシチョフ更迭まで「忠実なレーニン主義者」（フルシチョフのこと）にへつらい、彼のあらゆる軽率な即興を媚びるように支持していたフルシチョフの側近たちへの不満が募っていたとある。ここでは、このことが総会で討論をおこなわないことを幹部会が選択した理由のひとつとされている。

59) В.П.Наумов，В.В.Рябов，Ю.И.Филиппов，“Об историческом пути КПСС в свете нового мышления”，《Вопросы Истории》，1989，№10，стр.7.

60) Наше отечество，Т.2，стр.482.

61) Неизвестная...，стр.277-8.

62) А.Александров-Агентов，Указ. статья，стр.38.

（まつど きよひろ・東京大学大学院・人文科学研究科）